



シニアライフアドバイザー
松本すみ子

(有)アリア代表、NPO法人シニアワークスRyoma 21理事長。シニアライフアドバイザー、キャリアコンサルタント。早稲田大学第一文学部卒業。団塊・シニア世代の動向研究とライフスタイル提案、市場分析などを行い、講演・執筆など多数。大人のためのインターネットラジオ「あすも」のMC。著書に『地域デビュー指南術〜再び輝く団塊シニア』（東京法令出版）など。

と、別の地区からの参列者が、うちも撮ってほしいと言ってくるので、次々と依頼が増える。一方で、問題も見えてくる。一番深刻なのは高齢化だ。また、豪雨などによる地形の劣化は著しい。ある紅葉の名所に台風で大崩落が起きた。その場所で営業する茶屋は迷った末、手前の道路だけ少し整備して、なんとかお客さんと呼んだことがあった。やって来た観光客は、山崩れや通行止めを見て驚いていた。

しかし、藤田さんは紅葉の美し



元気バスで街から戻った老婦人。

さとともに、山が大変なことになっていると理解してもらえれば、それも一つの効果だと思う。日本の国土は74%、高知県は84%が森

”世の中にはバカもおらんと”

集落に何度も出かけ、そこに住む人々と触れ合い、了解を得て写真を撮り、複数のアルバムに仕上げ、写真に登場した人たちがそれぞれにも記念の写真を渡す。藤田さんはこの費用をすべて自費で賄っている。プリントは多いときで月に300枚。それにかかるインク代が3万円、車のガソリン代が2万円。手土産も含めて、活動にかかる費用を月に6万円と予算化しているそう。ただし、写真展の費用はそれは別。

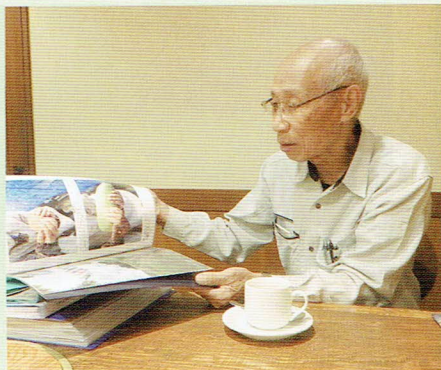
地区の神祭を撮るときは必ずお酒を持参する。付き合いを大事にしたいので、そのお酒は地元のお店で買うことにしている。終了後はお供えしたものを皆さんと一緒にいただく直会なまひらひにも参加する。季節によっては、こうした神祭が数回あるそう。

また、主にお年寄りを撮っているの、訃報も多い。そのときもお香典やお供えを持ってお悔やみに行く。そして、必ず手紙でその

林だ。この姿が現状であり、それを伝えることも自分の役目だと考えている。「だから、楽しい写真ではない

の中にはバカもおらんと」と返事をする。

方への思いを綴り仏前に捧げる。こうした細やかな心遣いにもそれなりの費用はかかるだろう。失礼ながら年金暮らしで、活動費用は大変ではないのかと聞いてみた。「人の3倍くらい働いて稼いできたので、ある程度の貯金があります。69歳まではパート社員として電気の保守の仕事をしていたし、今でもときどきやっていいます」と、それほど意に介していません。奥さんにはお父さんはバカだと言われるそう。でも、「世



今日中に届けたいので、夜中の1時半からアルバムづくりをしていた

中にはバカもおらんと」と返事をする。日本には、こういう「善意のバカ」ともいべき人が時々登場する。先ごろ、行方不明になった2歳の幼児を山の中から救い出しただろうか。自費で日本中のボランティアにかけ、幼児の祖父から「せめて、お礼にお風呂を差し上げたい」と言われても、ボランティアは被災者に負担をかけてはいけないという規律を頑なに守った。それほど頑なではないが、藤田さんにはこのボランティアの男性と同じ鬱陶気を感じる。ただ、藤田さんが違うのは、自分の住む地域とそこに暮らす人々への愛着があることだ。今も年間100日くらいは撮影に出かける。山の現状から見た地域の姿をあと5年は撮り続け、訴えていきたいと言っている。そして、「あと3年くらいで金婚式だから、記念の自費出版を考えたいです」とも話してくれた。それはぜひ実現してほしいと思った。

ものも多いです」。そう言いながら見せてくれたアルバムには、もちろん集落の人たちの笑顔溢れる写真もたくさん載っていた。